



現在の飛翔とはかなり内容が違い、先生方や学生から記事を募る自由投稿型の雑誌だったようです。

また、当初はすべて白黒でしたが、号数が増えることに表紙、裏表紙、グラビアのページがカラーとなっていきました。雑誌の大きさも第四十九号までは、今の三分の二の大きさでした。

過去の記事は、前述したように寄稿が主体の雑誌であったため、先生方が専門分野について書いた論文形式の記事が掲載されていました。また、学生からも問題提起をした積極的な論文だけでなく、外部からの、例えば警察署の方からの投稿もありました。多くの人の意見が詰まった、学生にも先生方にも糧となるような一冊の本のようでした。

号数を重ねるに連れて、様々な企画が登場します。一番長く続いている企画が『研究室紹介』です。五十号（一九九六年）から始まり、十年にわたって続く長寿企画です。また、名前は違いますが、過去には「学問のすすめ」「教官インタビュアー」としても研究室を紹介していたようです。

それではここで、過去の記事の中から面白い記事を抜粋したいと思います。

* * * * *

今回七十号を迎える飛翔。ここで飛翔の歴史を振り返ってみましょう。
飛翔第一号は一九七四年（昭和四十九年）に発行され、それから一年に二回のペースで発行されていきました。発行当初の飛翔は、

編集後記 五十四号より

・ある日、コンビニでパック牛乳を買ったら、割り箸がついてきた。

・一括変換クイズ

著部リンパ腫場 真行ける弱村

汲め博（みなさん読めますか？）

編集後記には編集員の苦労とつばやぎ、そして、ちよっとした遊び心が表れています。みなさんは読めましたか？

風刺漫画 二十八号より

「君の長所は？」と面接官から投げかけられた質問をテニスボールに見たてて、それを「私は明るいです」と返答を書いたラケットで面接官にボールを返す。この絵を描いた編集員は「ちゃんと返さなくちゃ、面接試験」と答えています。まさに就職試験で焦る学生を見事に風刺で表現しています。

四九生（一期生）に聞く 八号より

「卒論の書き方教えます」

これから卒論を始める人たちに捧げる卒論
対処三箇条として たかが卒論とたかをくく
るう。こう思いこむことが、卒業研究を無事
に終えるために、一番重要な点だと思う。身
体を壊したらおしまいだ。 にぎやかな研究
室に入り込もう。色々な話が聞けて楽しかる
うし、知人をたくさん作っておくにこしたこ
とはない。 卒論は早く書きあげよう。何で
もいいから早く終わっちゃったほうが楽でい
い。

卒論は、大学で学問をした、ということの
記念碑である。しかし、記念碑にしてしま
うことのできない数多くの貴重な体験を四年間
の大学生活で学ぶことができた、という事も、
忘れられない実感である。

さよなら東千田キャンパス四十四号より

総合科学部には総合科学部独特の「匂い」
があることを皆さんは知っていますか？それ
はサビとカビとかが混ざり合ったような、い
い匂いとはいえないにしてもどことなくつ
かしい匂いです。

ここにちは西条 四十四号より

学生・教職員をはじめとして、新たにこの
地に居を構えようとする人々からも、受け入
れ体制の不備や都市基盤整備の遅れなどが指
摘されています。「好き好んで移転したわけ

文つる
で「大受好」
鎌倉の「大受好」
わえ仁大繼すスえけ感
頼んで来てもらった